

音声・音韻研究の現状と展望

高慧禎*

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese phonetics and phonology

This study explores recent research trends in Japanese phonetics and phonological studies by analyzing 56 research articles that were published in 18 academic journals registered in Korea from 2019 to 2020. As a result of the analysis, it was confirmed that as in the previous cycle, studies in this field concentrated on phonetic education for Japanese learners (44.7%) rather than Japanese phonetics and phonological studies (32.1%). This trend can be said to be a result of the research environment in which it is difficult to acquire phonetic data of native Japanese speakers in Korea. Accordingly, in recent studies, it can be pointed out that the transcription data of phonetic databases using corpus and the text data of communication language (通信言語) are being adopted to phonetic studies. Also noteworthy is a study that experimented textual information from a cognitive psychology perspective. Further, looking at the research topics by field, the phonetic studies (55.3%) are particularly active in studies focusing on prosody, whereas most of the phonological studies (39.3%) focus on the latest theory and Sino-Japanese studies that focus on segmental sounds. Therefore, in the future, if empirical phonetics and theoretical phonological studies proceed in this field in a mutually beneficial relationship, and if this combines with the training of young academic successors and Japanese language education, it is expected that research in this field, currently stagnant, will make great progress.

Field : Phonetics, Phonology

Keywords : Segment, Prosody, Phonetic education, Phonological theory, Sino-Japanese

1. はじめに

本稿は、2019年から2020年にかけて韓国内で発表された日本語音声学・音韻論に関する研究論文の調査を行い、この分野における研究動向を把握し、今後の研究方向を展望することを目的とする。

本誌は、2015年から2年ごとに1回の「韓国における日本語学研究(音声・音韻)の現状と展望」というテーマで企画論文を発表してきた。今回の調査報告は3周期に該当する。そこで、本稿では、1周期(2015~2016年)と2周期(2017~2018年)に報告¹⁾されてきた調査の結果を踏まえたうえで、今期における音声学・音韻論に関する研究の流れと動向について以下の4点に主眼を置いて述べることにする。

まず、日本語学の研究分野の中で音声学・音韻論に関する研究の占める割合と、この分野における各領域の研究の比重を以前の報告と比較・検討し、各領域別における研究の実態を把握する。

* Catholic関東大学校 副教授、音声学・音韻論

1) 関光準(2017)、酒井真弓(2019)を参照されたい。

第二に、音声学・音韻論分野の研究者層がさほど厚くないから、各周期別に発表された論文の著者数を調査し、周期別の研究者の推移を把握する。また、研究者の国籍別の分布も調べる。なおかつ、この分野で発表された論文の作成言語の現況と文系における共同研究の実態も探る。

第三に、今期に発表された研究の分析方法を分析し、その結果に基づき、今後の課題を展望する。韓国における音声学の領域では、高慧禎(2012)にも言及しているように、20世紀以降から実験機器²⁾の技術的發展と音韻理論の進展により、実験音声学的研究が頻繁に行われている。今回の調査からも確認できるように、音声学の領域はもちろん、音声教育の領域においても客観的な研究方法による実験研究が増えているのが現状である。また、音声会話コーパスを活用した音声教育に関する研究報告も続いている。そこで、本稿は、研究分野を大きく三つ、(1)音声学および音声教育、(2)音韻論、(3)文字と表記に分類して各領域における研究方法を以下のようにさらに分けて分析を行い、その結果を述べる。

(1)に対する分析方法は、次の4つに分けられる。

- ① 主観的方法(内省)による伝統的調音音声学及び聴覚音声学的研究
- ② 客観的方法(実験機器)による音響音声学的研究
- ③ アンケート調査
- ④ コーパスの活用

(2)に対する分析方法は、次の2つに分けられる。

- ① 文献中心の音韻現象と音韻理論
- ② コーパスを活用した音韻理論

(3)に対する分析方法は、次の2つに分けられる。

- ① 文献中心の調査
- ② オンラインを活用したアンケート調査

最後に、今期に発表されたこの研究分野における研究テーマを調査分析し、韓国における現代日本語の音声・音韻研究の流れを把握することにする。

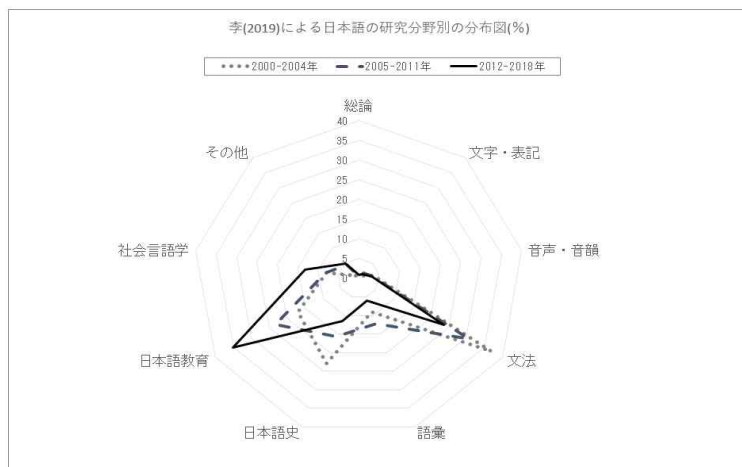
2. 日本語学研究の現状(2000～2018年)

本調査に先たち、2000年から2018年までに韓国内で行われた日本語学研究の動向について言及しておく。つい最近の研究として李康民(2019)が挙げられる。李康民は5つの学術誌³⁾に掲載された研究論文を日本語学分野の各領域別に調査を行い、2000年から2018年⁴⁾に至る日本語学研究の現状を報告した。その結果を筆者が図式化し、以下の〈図1〉のように示す。

2) 最近は、WaveSurfer(ウエーブサーファァー)またはPraat(プラート)のようなフリーソフトなどを用いた音声実験研究が増えている。

3) 調査対象の学術誌は、『日本学報』(韓国日本学会)、『日語日文学研究』(韓国日語日文学会)、『日本語文学』(韓国日本語文学会)、『日本語学研究』(韓国日本語学会)、『日本語教育研究』(韓国日語教育学会)である。

4) この期間を1周期(2000～2004年)、2周期(2005～2011年)、3周期(2012～2018年)に分けて分析し、考察を行っている。



〈図1〉各周期別における日本語学の分野別の分布図

〈図1〉を見ると、2000年から2018年における日本語学研究の動向を把握することができる。各周期別に比較してみると、日本語教育と社会言語学分野の研究はだんだん増えているのに対し、その他の分野は減っていることが見て取れる。その中でも、音声学・音韻論(3.5%→3.2%→3.2%)と文字・表記(1%→1.7%→1.4%)の研究は他の分野に比べて著しく低い水準にとどまっていることが確認できる。

3. 研究範囲と調査対象の学術誌

本調査は、韓国学術誌引用索引(KCI: Korea Citation Index)サイトの「日本語と文学」に分類された韓国研究財団の登載学術誌の18種⁵⁾を対象にした。また、研究範囲については、現代日本語における音声・音韻および文字・表記に関する研究論文に限定した調査を行うことにする。〈表1〉は今期に発表された日本語学の研究および現代日本語の音声学・音韻論に関する研究の論文本数を表したものである。論文の掲載本数が多い順に18の学術誌を並べかえて示している。

5) 『翰林日本学』(翰林大日本学研究所)の場合、この18種の学術誌には入っているが、ここに日本語学に関する研究論文が見当たらなかったため、本調査の対象から外した。その代わりに、東国大日本学研究所発行の『日本学』を調査の対象に含めた。

〈表1〉調査対象の学術誌および音声学・音韻論に関する研究論文数(2019～2020年)⁶⁾

No	発行機関	学術誌	対象巻 (号)	語学 論文数	音声・音韻 論文数
1	韓国日語教育学会	日本語教育研究	46-53	96	8
2	韓国日本語学会	日本語学研究	59-66	93	7
3	韓国日本語教育学会	日本語教育	87-94	69	5
4	韓国日本言語文化学会	日本言語文化	46-53	57	5
5	韓国日語日文学会	日語日文学研究	108-115	62	4
6	大韓日語日文学会	日語日文学	81-88	61	4
7	韓国日本語文学会	日本語文学	80-87	47	4
8	東アジア日本学会	日本文化研究	69-76	29	4
9	韓国日本文化学会	日本文化学報	80-87	57	3
10	漢陽大日本学国際比較研究所	比較日本学	45-50	35	2
11	韓国日本学会	日本学報	118-125	32	2
12	高麗大グローバル日本研究院	日本研究	31-34	6	2
13	日本語文学会	日本語文学	84-91	75	1
14	韓国外大日本研究所	日本研究	79-86	30	1
15	韓国日本近大学会	日本近大学研究	63-70	26	1
16	中央大日本研究所	日本研究	50-53	20	1
17	東国大日本学研究所	日本学	48-52	15	1
18	檀國大日本研究所	日本学研究	56-61	12	1
合計				822本	56本(6.8%)

〈表1〉から確認できるように、今期における日本語学研究の総論文本数は822本であったが、そのうち、音声学・音韻論に関する研究論文数は56本(6.8%)であった。また、この分野において各学術誌に発表された研究論文をみると、大学研究所の学術誌よりも「日本語と日本語教育」に関わる学会誌の方が多かった。例えば、韓国日語教育学会(8本)が一番多く、その次に韓国日本語学会(7本)、韓国日本語教育学会(5本)、韓国日本言語文化学会(5本)の順に多くなっていた。

このような結果は、研究者が専門性を考慮に入れた学会への発表と論文投稿、そして知的交流のための談論の場となり得るところを好むために見られる傾向であると考えられる。また、4.1で触れる研究動向を見ても、日本語教育に関する研究論文の比重がより高いことに起因した結果であると考えられる。

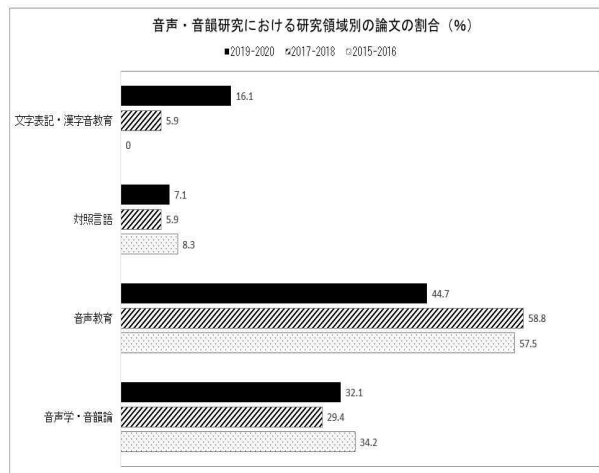
4. 音声学・音韻論分野の研究動向

6) 洪珉杓(2019)の報告に基づき、この表を作成している。

4.1 音声学・音韻論分野における周期別の研究推移

〈表2〉周期別における音声学・音韻論研究分野の論文数(%)

周期	調査時期	研究領域				合計 (%)
		音声学・音韻論	音声教育	対照言語	文字表記・漢字音教育	
1	2015-2016	25 (34.2)	42 (57.5)	6 (8.3)	–	73(100)
2	2017-2018	10 (29.4)	20 (58.8)	2 (5.9)	2 (5.9)	34(100)
3	2019-2020	18 (32.1)	25 (44.7)	4 (7.1)	9 (16.1)	56(100)



〈図2〉音声学・音韻論における研究領域の論文の割合

ることが確認できる。今回の調査では、漢字音と漢字教育、文字と表記、文字と音声、文字と認知に関わる論文を調査範囲に入れたため、この領域の研究論文が増えているように思われる。

〈表2〉および〈図2〉は2015年から2020年に至る音声学・音韻論研究分野の論文数を周期別に示したものである。2015年から2016年までを1周期、2017年から2018年までを2周期、2019年から2020年までを3周期に分けて、6年間発表されてきた論文本数の割合を図式化して〈図2〉に示した。

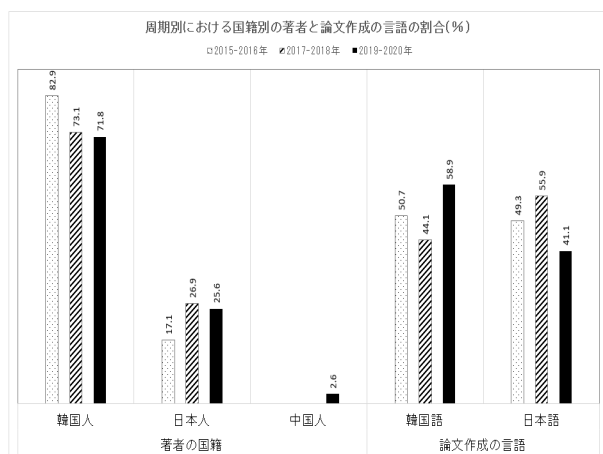
〈図2〉を観察すると、各周期の論文本数は音声学・音韻論研究よりも、音声教育のような応用言語学的研究のほうが多かった。例えば、44.7%が音声教育に関する論文を占めており、その次に音声・音韻(32.1%)、文字・表記と漢字音に関する研究(16.1%)、対照言語(7.1%)の順になっている。

4.2 周期別における著者数と論文作成の言語

〈表3〉周期別の著者数と論文作成の言語の割合(%)

周期	著者の国籍(%)			著者数	論文作成の言語論文数(%)		総論文数
	韓国人	日本人	中国人		韓国語	日本語	
1	29(82.9)	6(17.1)	–	35(100)	37(50.7)	36(49.3)	73(100)
2	19(73.1)	7(26.9)	–	26(100)	15(44.1)	19(55.9)	34(100)
3	28(71.8)	10(25.6)	1(2.6)	39(100)	33(58.9)	23(41.1)	56(100)

〈表3〉及び〈図3〉は、各周期別に発表された論文の著者を国籍別に分けてそれぞれの割合を表したものである。また、論文作成時の使用言語に関する割合も示した。〈図3〉から分かるように、まず今期における国籍別の著者は韓国人が71.8%であるのに対し、日本人と中国人が28.2%であった。今期の特徴は、日本人の著者数が多少増えている点と、中国人の著者も見えるという点である。次に著者別の論文作成時の言語選択については、〈図3〉から見て取れるように、2周期(2017～2018年)には韓国語作成の論文より、



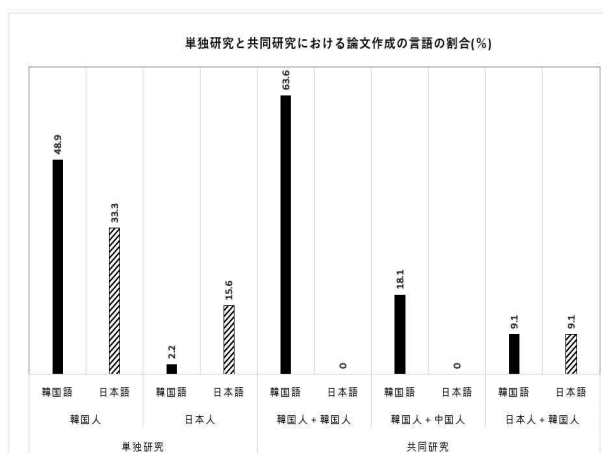
日本語作成のほうが多かったが、今期では日本語作成の論文(41.1%)より、韓国語作成の論文(58.9%)の割合がやや高くなっていることが確認できた。

〈図3〉周期別における著者と論文作成の言語の割合

4.3 単独研究と共同研究の割合

〈表4〉単独研究と共同研究の著者の国籍分布と作成言語の割合(%) 単位: 著者数(名)、論文数(本)

周 期	単独研究			共同研究			合計(%)
	国籍	作成言語	論文数(%)	国籍	作成言語	論文数	
3	韓国人	韓国語	22(48.9)	韓国人+韓国人/ 中国人	韓国語	9(63.6)	31(55.4)
		日本語	15(33.3)		日本語	0	15(26.7)
	日本人	韓国語	1(2.2)	日本人+韓国人	韓国語	1(9.1)	2(3.6)
		日本語	7(15.6)		日本語	1(9.1)	8(14.3)
合計(%)			45(80.4)			11(19.6)	56(100)



〈図4〉単独研究と共同研究の国籍別作成言語の割合

〈表4〉および〈図4〉から確認できるように、韓国人研究者の場合、韓国語作成の論文数が比較的に多かった。それに日本人研究者の場合にも韓国語で作成された論文が多少見かけられた。

次に、単独研究と共同研究の占める割合を〈表4〉に示した。〈表4〉で確認できるように、単独研究の占める割合は80.4%であるのに対し、共同研究は19.6%の水準にとどまっていた。共同研究の場合、全部で11本あったが、そのうち、9本の論考は韓国人研究者2人の研究と韓国人+中国人研究者が執筆したものである。これらの研究

は日本の漢字音に関わる研究である。残りの2本は二人(日本人+韓国人研究者)の共同研究で音声教育に

関する論考と、三人(日本人二人+韓国人研究者)の共同研究で音声教育実践に関する論考が見られた。このことから、共同研究はたいてい日本語教育に関わる領域で頻繁に行われていると考えられる。

4.4 研究方法

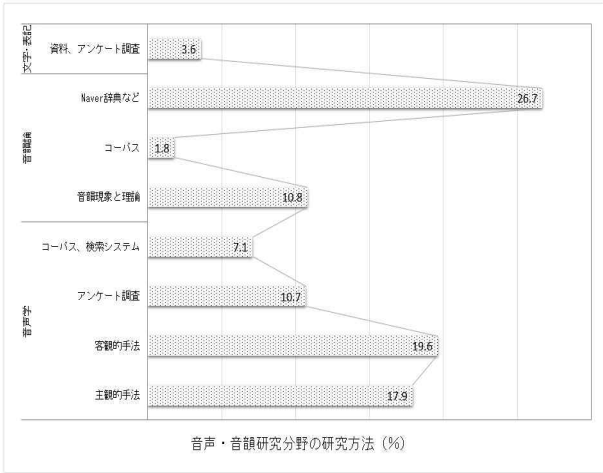
今期に発表された研究の分析方法を調べ、その結果を以下の〈表5〉および〈図5〉のようにまとめて示す。

〈表5〉音声学・音韻論、文字と表記分野の研究方法

分野	研究方法	分析方法	論文数(%)	研究テーマ
総論		文献資料	1(1.8)	・音声・音韻研究の現状
音声学 と 音声 教育	主観的手法	内省、聴覚印象	10(17.9)	・対照研究、方言研究 ・音声教育(中間言語、発音評価など)
	客観的手法	音響実験、聴覚実験	11(19.6)	・音声教育(発音評価、発音指導) ・認知心理(漢字単語の認知)
	アンケート 調査	インタビュー、 内省ノート	6(10.7)	・音声教育(MOOCs、発音ビリーフ) ・継承語に関する発音誤用
	コーパス、 検索システム	音声会話データベースの 転写資料、キャスフィ	4(7.1)	・音声教育(発音習得) ・文字と通信言語(打ち言葉)
小計			31(55.3)	
音韻論	音韻現象と 理論	文献資料	6(10.8)	・子音、母音弱化、母音融合、前鼻音 化、通時的変化など
		漢和辞典、Naver辞典など	15(26.7)	・比較言語(漢字音) ・漢字教育
	コーパス	韻ノート	1(1.8)	・音節
小計			22(39.3)	
文字・ 表記	実態調査 認識調査	資料 Googleフォーム利用のア ンケート	2(3.6)	・日本語の仮名とハングル表記 ・韓国語の表記と日本語のカタカナ 表記
小計			2(3.6)	
合計			56(100)	

〈表5〉をみると、この分野における論考は全部で56本であったが、そのうち、音声学と音声教育に関する研究の割合は55.3%を、音韻論的研究は39.3%を、文字と表記に関する研究は3.6%を占めていることが確認できた。このことから、韓国内では現代日本語の音韻論的研究よりも、音声学と実用学問である音声教育に関する研究が頻繁に行われていると考えられる。

以下の〈図5〉を見ると、音声学の領域においては、主観的手法による音声分析を行った研究が17.9%、客観的手法による音声分析を行った研究が19.6%、アンケート調査による研究が10.7%、コーパスか検索システムによる研究が7.1%を占めていることが分かった。以上のことは、韓国における科学とICT技術の進展のおかげで、様々な研究方法を介した音声研究が進められてきたと予測される。一方、音韻論の



〈図5〉研究方法

領域においては、漢和辞典やウェブ辞典などを用いて漢音資料の分析を行った研究が26.7%でやや高い比重を占めている。続いて音韻現象と音韻理論による研究が10.8%、コーパスによる研究が1.8%を占めていることも確認できた。

ここで注目に値する点は、音韻論と音声教育の領域で用いた分析方法を見ると、コーパスや検索システムを活用した論考が持続的に出てきたということである。また、日本語教育の領域でも、音響分析を通じた実験研究が増えている。こういった分析方法を用いた研究は、これからも持続的に増えていくだろう。なぜか

というと、韓国内での研究環境を考えると、研究パラダイムに合う日本語母語話者の音声データを確保するのが難しいため、研究に多くの制約が伴う。しかしながら、最近では、インターネットさえ繋がれば、音響分析ができる初心者向けのフリーソフトが手に入るようになったし、また、コーパスを活用した日本語の大量な音声データも容易に確保できるようになったからである。

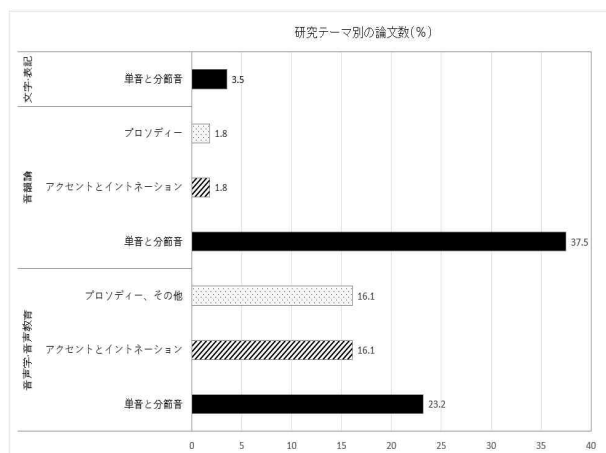
4.5 研究テーマ

研究テーマ別に分類して調査結果をまとめたものを以下の〈表6〉および〈図6〉に示す。

〈表6〉音声学・音韻論分野におけるテーマ別の分類(%)

分野	項目	論文数(%)	細部主題
音声学と 音声教育	単音と分節音	13(23.2)	単音、清音と濁音、促音と撥音、摩擦音の長さ、破裂音、母音の長短、発音習得など
	アクセントとイントネーション	9(16.1)	アクセント対照研究、形容詞のアクセント、外来語のアクセント、文字とイントネーション
	プロソディー、その他	9(16.1)	発話速度、ポーズ指導、発音指導、発音変化、After Recording、シャドーイング指導など
音韻論	単音と分節音	21(37.5)	漢字音、古形表記、語頭子音、母音弱化、母音融合、前鼻音化の通時的変化など
	アクセントとイントネーション	1(1.8)	音調変化
	プロソディー	1(1.8)	音節
文字と表記	単音と分節音	2(3.5)	日本語の仮名とハングル表記など
合計		56(100)	

〈図6〉を垣間見ると、まず、音声学と音声教育の場合は、単音と分節音に関する研究が23.2%の割合で



＜図6＞研究テーマ別の分布

ン、ポーズ、発話速度などのようなプロソディーに関する研究はそれほど多くないことが確認できる。特に日本語の音声教育のほうでは日本語学習者に対する日本語の発音に注目した論考が多く見られたが、これらの論考には単音と分節音に焦点をおくものよりも、日本語の流暢さと関わってくるプロソディーに注目した研究が多かった。以下に、詳しく研究テーマ別にそれぞれの研究について言及していく。

4.5.1 単音と分節音

単音と分節音に関する論考は13本ほど見られる。細部テーマ別にいうと、日本語学習者に対する音声教育絡みの論考として子音と母音に関する研究がある。また、中間言語としての日本語の発音習得⁷⁾と発音教育に関する研究も見られた。この他に、打ち言葉における特殊拍の問題を扱っている論考が1本ある。以下に詳しく紹介する。

まず、日本語の子音に関する論考には4本あった。第1に、金允英の「韓国人日本語学習者の日本語破裂音に関する研究」(『日本語文学』82)の論考では、日本語の破裂音について日本語初級学習者を対象に音響実験を行い、日本語話者との違いを報告している。陣宗福の「自発音声による韓国人学習者の日本語の語頭有声破裂音の習得実態」(『日本語教育研究』52)の論考では、コーパスによる音声データを用いて語頭破裂音の分析を行い、学習者の日本語の発音習得の実態を指摘している。続いて、関光準の「日本語語頭有声破裂音の+VOTと音声教育」(『日本語学研究』62)の論考では、コーパスによる日本語方言の音声データを音響実験から分析し、その結果、日本全国にわたって語頭有声破裂音が+VOT化が起っていることを指摘し、その現象が日本語教育へも応用されるべきであろうと報告した。この他に、日本語学習者における日本語摩擦音の長さの実現について生成実験と聴覚実験から分析した曹秀弦「後続母音の長短による日本語摩擦音の音声的な長さの実現 - 遅延反復課題を用いた生成実験と聴覚的評定に基づいて -」(『日本語教育』88)の論考も注目に値する。

次に、日本語の母音や中間言語としての発音習得と発音教育の問題について述べた論考が5本見られ

やや高く、続いてアクセントとイントネーションに関する研究とプロソディーなどに関する研究がそれぞれ16.1%を占めていることが確認できた。一方、音韻論の場合は、前で触れた音声学と音声教育分野の結果とはやや異なり、単音と分節音に関する研究が37.5%の割合で一番高く、アクセントとイントネーションに関する研究は1.8%、プロソディーなどに関する研究が1.8%を占めていることが分かった。

以上のように、音声学においても音韻論においても単音と分節音に関する研究が多く、アクセントとイントネーション

7) 言語習得に関するテーマには分節音のみならず、超分節音も含めた分析を行った研究が1本あったが、このテーマに論文本数をいれている。

る。まず、高慧禎の「初級学習者の発話に見られる日本語母音の長短に関する音声学的特徴」(『日本語教育』93)の論考では、日本語初級学習者に対する日本語の母音の長短を音響的特徴として持続時間とF0に着目して分析を行い、母音の長短を自然に発音するには音声的特徴として長さだけではなくピッチも重要であることを指摘している。続いて、中間言語としての日本語学習者に対する日本語の発音習得に関する論考は2本あった。山本裕子・関光準の「韓国人国際結婚移住女性における日本語発音習得の縦断分析」(『日本語教育研究』48)と、関光準の「日本語外来語の発音習得の言語依存性と普遍性」(『日本語教育研究』53)が見られたが、これらの研究はコーパスの音声データから分析資料を抽出し、それを日本語母語話者が転写したものを分析対象にしている点が注目に値する。また、酒井真弓の「韓国人交換留学生の日本語音声習得に関する縦断研究」(『日本学報』124)の論考では、日本留学の前後における日本語学習者の音声⁸⁾にどのような変化が起こっていたかをアンケート調査から、その結果に対する考察を行っている。この他、上野由香子の「韓日国際児の日本語誤用分析 - 発音領域の誤用を中心に -」(『日本語文学』87)の論考では、継承語である日本語の発音領域の誤用について韓日国際児を対象に日本人児童と韓国人日本語学習者の誤用と比較して分析を行い、その結果を述べている。

最後に、日本語の清音と濁音、促音と撥音のような発音教育と単音の発音に対するピア評価に関する論考が4本あった。牟世鍾の「日本語の発音教育について - 清音と濁音の教育方法 -」(『日本言語文化』49)と「日本語の発音教育について - 促音と撥音の教育方法 -」(『日本言語文化』52)が見られた。また、伊藤茉莉奈の「言語的文脈が多様な日本語学習者間の単音の発音に対するピア評価の意義」(『日本語学研究』60)などもあった。この他に、新しい視点からの「打ち言葉」における特殊拍の使用実態を分析した崔鉉弼の「打ちことばにおける特殊拍の非規範的使用とその機能に関する考察 - キャスフィの小中高生掲示板の分析を通して -」(『日本言語文化』49)の論考が目に入る。

4.5.2 アクセントとイントネーション

日本語のアクセントとイントネーションに関する論考は9本あった。その細部テーマは4つに分けられるが、まず、日本語母語話者を対象にした日本語のアクセントに関する研究1本と、韓国人日本語学習者を対象にした日本語のアクセントとイントネーションに関する研究が5本ほどあった。次に日本語と韓国語におけるアクセントの対照研究が3本見られた。最後に、検索システムを用いて打ち言葉の長音符とイントネーション表現を分析した研究が1本あった。以下に紹介することにする。

まず、李香蘭の「日本語の形容詞の連体形と終止形アクセントの実態調査」(『日本文化学報』80)の論考では、韓国に滞在している日本人を対象に伝統的な研究方法論である聴覚的印象による分析を行い、日本語形容詞のアクセント実態を報告している。

次に、李範錫の「韓国人日本語学習者の日本語アクセントの実相 - 大邱地域出身学習者の場合 -」(『日本語学研究』61)の論考では、韓国の大邱出身20代の日本語学習者を対象にして日本語のアクセント実態を音響実験による分析を行っている。続いて、鈴木美恵の「韓国人日本語学習者の外来語発音のアクセントの分析 - 旧JLPT語彙を中心に -」(『日本文化学報』82)の論考では、韓国の忠清道出身20代の日本語学習者を対象に外来語アクセントの実態を日本語母語話者の内省判断による分析を行っている。また、文レベルでのイントネーションに関する研究についてであるが、北野孝志の「韓国人日本語学習者の句末のピッチパターンに関する考察 - 日韓同一文章を用いた比較対照 -」(『日語日文学研究』108)

8) この論考では、日本語の音声習得に関する調査項目を分節音のみに限らず、超分節音の側面にも注目した分析を行っている。

の論考では、韓国語ソウル方言話者日本語学習者によく観察されるという語尾上げ現象の原因を音響実験から究明している。この他に、李炯宰の「初級学習者の日本語のイントネーションの特徴の考察」(『日本語文学』87)の論考では、日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価とピッチレンジの結果に基づき、学習者に対する日本語のイントネーションの特徴と問題点を言及している。

三つ目に、日本語と韓国語におけるアクセントの対照研究に関する論考について述べる。まず、姜英淑の「韓日両言語におけるアルファベット頭文字語のアクセント研究—釜山方言と鹿児島諸方言を中心に—」の論考では、韓国語釜山方言と日本語鹿児島諸方言におけるアルファベット頭文字語に関するアクセントの特徴を内省判断による分析を行い、それぞれのアクセント体系の違いを報告している。次に、孫在賢の「韓国語大邱方言の接辞・副詞・転成名詞のアクセント—日本語東京方言との対照を兼ねて—」(『日本語教育研究』46)の論考では、韓国語大邱方言と日本語東京方言における接辞・副詞・転成名詞に関するアクセント特徴を内省による分析から報告している。この他にも孫在賢は日本語東京方言と韓国語統営方言のアクセント体系を示し、それぞれの音調の異同を説明している。

最後に、崔鉉弼の「打ちことばにおける長音符によるイントネーション表現に関する考察—キャスフィにおける小中高生掲示板の分析から—」(『日本言語文化』51)の論考では、日本の学生コミュニティサイトを通して打ち言葉で用いられている長音符とイントネーションの表現との相関性を報告している。

4.5.3 日本語教育実践とプロソディー

韓国人日本語学習者に対する日本語の音声教育に関する研究が9本ほどあった。細部テーマ別にいうと、日本語の発音に関するビリーフの論考が2本、日本語教育実践(発音の変化、発音指導、教授・学習方法など)の論考が4本、また、プロソディーに注目した教授・学習方法(After Recordingとシャドーイング)の有効性を述べた論考が2本あった。この他、日本語学習者における日本語漢字語の聴覚的認知に関する論考も1本見られた。詳しく紹介することにする。

まず、日本語学習者の発音に関するビリーフ研究には金姪衍の「韓国人日本語学習者の日本語の音声学習戦略と学習信念及び学習動機に関する研究」(『日語日文学』84)と、李玟兒の「韓国人日本語学習者の発音に関するビリーフ—因子分析を中心に—」(『日語日文学』88)があった。これらの研究はいずれもアンケート調査の結果に基づき、学習者の発音や単音をはじめ、アクセントやイントネーションなどのプロソディーに注目した分析と考察を行っている。

次は、音声教育実践に関する研究報告について言及していく。具体的な細部テーマは、学習者に対する発音指導、発音の変化、発音の評価、それから、グローバルMOOCsにおける日本語の発音に関する研究が見られた。まず、発音指導や発音評価などについて述べた研究には李玟兒の「日本語の発音指導の授業における学習者の行動と考え方の分析—授業参加観察とインタビューを通して—」(『日本文化研究』74)と、金姪衍の「ポーズの指導が韓国人日本語学習者のスピーキングの流暢性評価に与える影響」(『日本近大学研究』70)が見られた。また、李玟兒の「韓国人日本語学習者の発音の変化」(『日本語教育』91)の報告では、発音指導の授業で日本語の自然さに関わっているアクセントやイントネーションのような韻律の特徴に焦点を当て、学習者の発話を音響音声学的観点から分析し、学習者の発音の変化を検討している。

この他にも、オンライン日本語の発音講座に関する研究が見られたが、戸田貴子ほかの「グローバルMOOCs⁹⁾における日本語発音オンライン講座—韓国人学習者および教師を対象とした調査から—」(『日

本語学研究』63)の論考は、オンライン日本語の発音講座を受講した、韓国人学習者と韓国人教師のアンケート調査に基づき、学習者の学び、授業内容の理解、発音の練習方法、教育効果などの分析を行い、ICTを活用した日本語の音声教育の可能性を示唆している。

最後に、日本語の発音教育のための教授・学習方法に関する研究報告について言及する。趙大夏の「日本語の音声教育においてAfterRecordingの活用に関する研究」(『日本語教育研究』49)の論考は、発音やプロソディー学習、聞き取り練習に活用されるというアフターレコーディング(After Recording)とプロソディーシャドーイング(Prosody Shadowing)などのような教授・学習方法の有効性を検討し、その結果を報告している。このような教授・学習方法を検討した崔眞姫の「課題遂行における内省ノートの分析-シャドーイング練習を対象に-」(『日本文化学報』82)の論考も見られる。

このように、日本語の音声教育に関する研究報告には発音教育に関する実践報告が数多く見られた。特に、音声教育に関する研究では単音や分節音に焦点を当てたものよりも、日本語の流暢さと自然さに関わってくるプロソディーに着目した実践研究が増えている傾向にある。この他に極わずかな本数ではあるが、新しい観点から文字と知覚に関わる実験を行った認知心理学的観点からの以下のような論考も見られた。

柳本大地の「韓国語母語学習者における日本語漢字の単語の聴覚的認知-ブライミング効果を利用した意味一致性判断課題を通して-」(『日本語教育研究』51)

現在、ここ数年前から科学技術の大きな進展のおかげでこのような研究ができるようになったと思われる。よって、今後は音声学・音韻論分野においても聞き手の立場による知覚・認知にも目をむける必要があると考える。

4.5.4 文字と表記

日本語の文字とハングル表記に関する研究について言及する。これに関する論考は極めて少ないが、趙南星の「日本語学習者の学習レベルによる仮名のハングル表記」(『日本語文学』87)の論考と、黒柳子生の「韓国語話者の韓国語カタカナ表記に関する一考察」(『日本語教育』94)の論考が目立つ。前者では学習者の学習レベルを考慮し、日本語の仮名がハングルでどのように表記されているかの実態調査を行っている。これに対し、後者では日本語学習者の母語である韓国語の表記に対して日本語のカタカナに表記する実験を行い、日本語学習者が日本語の音韻体系と音節構造をどのように認識しているのかを報告している。

このような両言語の文字と表記に関する議論は、日本語教育に重要な働きをすると考えられる。特に発音的側面から見ると、韓国人日本語学習者にとって音韻体系や音節構造が異なっている日本語の文字と表記をどのように認識し、またどのように産出しているかはとても重要な問題であると考えられる。

4.5.5 音韻論

今期では、日本の漢字音に関する研究、または、日本語の音韻現象と音韻理論(Optimality Theory)に関する研究が大半を占めている。

9) この表記は、韓国型MOOC、日本型MOOCのような、複数のMOOC(Massive Open Online Course)をさしている。

まず、音韻現象と音韻理論を基に議論している研究について述べる。柳春善の「母音変異の実現様相と要因に関する言語類型的考察-母音の無声化と中舌化を中心に-」(『日語日文学研究』110)の論考では、母音変異に関する音韻現象について考察している。ここでは3か国の言語(韓国語、日本語、英語)の母音弱化現象を言語別にどのように実現しているかを検討している。また、最適性理論の枠組みから日本語諸方言に現れる音韻現象を言及した研究も続いている。具体的な細部テーマを言うと、日本語丹後方言の母音融合、東北方言の前鼻音化、富山県海老江方言の中舌母音化、琉球与那国方言の語頭子音群の形成、鹿児島頰娃方言の前鼻音化の通時的変化に関するものがある。詳細は以下に示す。

孫範基の「日本語の母音融合の類型論-京都府丹後地域の方言から得られる類型-」(『日語日文学研究』115)

李炳勳の「頰娃方言の前鼻音化の通時的変化」(『日語日文学』81)

李炳勳の「北東北方言の前鼻音化と不透明性」(『日本文化研究』69)

李炳勳の「与那国方言の語頭子音群:最適性理論による分析」(『日本文化研究』73)

李炳勳の「最適性理論による海老江方言の中舌母音化の分析」(『日語日文学』85)

次に、日本、韓国、ベトナムの漢字音に関する研究が多く見られた。李炳萬の「近現代における和製漢語の漢字音選択について」(『日本語学研究』64)の論考では、近現代における和製漢語の読みに、どの漢字音が選択されるかを多くの事例から分析を行っている。また、李京哲の「韓国漢字音の一音節化の傾向について-合口3等陰聲韻を中心に-」(『日本近代学研究』64)の論考では、中国の中古音が韓国の漢字音に受容される際の様相を日本の漢字音と比較した考察を行っているが、このような漢字音に関するシリーズ研究が次々と発表されている。特に日本語教育に応用した日本の漢字音に関する研究成果が注目に値する。この他、漢和辞典の字音表記の問題を指摘した白惠英の「日本漢和辞典の古形表記の研究」(『日本学』48)も見られる。紙面の関係上、いくつかの論考のみを以下に示しておく。

崔殷赫の「常用漢字表の韓日漢字音対応関係の考察」(『日本学研究』56)

李相怡の「ベトナム漢字音との比較を通じた韓日漢字音の字音体系比較研究」(『日本語学研究』63)

李京哲・楊宇の「中国語音と日本漢字音の対応-中国語 唇音を中心に-」(『日本語教育研究』53)

河素貞・李京哲の「対応規則による日本漢字音の学習法一ト系列を中心に-」(『日本研究』32)

最後に、日本語のアクセントとライムについて言及した研究が2本見られた。一つは、孫在賢の「ピッチアクセント言語における音調変化-韓国語全羅道諸方言を例にして-」(『日本語学』84)の論考があった。孫在賢は通時的観点から日本語アクセントの変化を考究するため、アクセント体系が類似しているとされる韓国語全羅道諸方言のアクセント調査を行い、この方言にどのような音韻現象がアクセント変化に影響を与えているかを説明している。もう一つは、孫範基の「日本語のライム(rhyme)について-フリースタイルラップバトルの例から-」(『日語日文学研究』112)の論考があった。孫範基は「韻ノート¹⁰⁾」に載せられているフリースタイルラップバトルの言語資料から日本語ヒップホップ音楽のラップに現れるライム(rhyme)のタイプを分析している。

10) これは検索サイト(<http://in-note.com/>)である。(検索日:2020.12.30.)

5. おわりに

本稿は、2019年から2020年にかけて韓国研究財団の「日本語と文学」に分類されている18の学術誌に発表された「音声学・音韻論(文字・表記を含む)」に関する研究論文(56本)をテーマ別に紹介し、この研究の流れと動向を分析した。その結果は以下の通りである。

まず、この分野の研究推移を見ると、日本語の音声学・音韻論に関する研究(32.1%)より日本語の音声教育に関する研究(44.7%)が以前の周期の傾向と同様に、集中されていることが明らかになった。このような傾向は、韓国内で日本語母語話者の音声データ収集が難しい研究環境から起因した結果であると考えられる。そこで、最近では、コーパスを活用した音声DBの転写資料と通信言語の文字資料が音声研究に取り込まれているという点を指摘しておきたい。また、韓国内では非常に稀な研究であるが、今期の特徴として文字情報と意味との関係を認知心理学観点から捉えた研究が目に入る。この研究は音声学や認知言語学などの隣接学問として注目に値するものと考えられる。

次に、領域別の研究テーマを見ると、音声研究(55.3%)は超分節音に注目した研究が頻繁に行われていたのに対し、音韻および文字・表記に関する研究(39.3%)は単音と分節音に注目した音韻理論と漢字音の研究が大半を占めていることが分かった。

よって、今後は実証的な音声学と理論的な音韻論の研究が歯車のように相互有機的な関係の中で、この分野の研究を進めていけば、またさらに若手研究者の養成と日本語教育とも連携していくのであれば、現在留まっているこの分野の研究が大きく進展するものと展望する。

【参考文献】

- 高慧禎(2012)「한국어 악센트의 연구방법론 재검토」『東北亜文化研究』33 東北アジア文化学会 pp.257-268
 関光準(2017)「音声・音韻研究の現状と展望」『日本語学研究』51 韓国日本語学会 pp.9-19
 酒井真弓(2019)「音声・音韻研究の現状と展望」『日本語学研究』59 韓国日本語学会 pp.7-21
 李康民(2020)「한국의 일본어 연구—동향과 과제—」『日本研究論叢』51 現代日本学会 pp.254-271
 洪珉杓(2019)「語用論・社会言語学研究の現状と展望」『日本語学研究』59 韓国日本語学会 pp.67-82

《現代日本語の音声・音韻に関する研究論文一覧(2019-2020)》

- 姜英淑(2019)「韓日両言語におけるアルファベット頭文字語のアクセント研究—釜山方言と鹿児島諸方言を中心に—」『日語日文学』83 大韓日語日文学会 pp.157-174
 高慧禎(2020)「초급학습자 발화 속 일본어 모음의 장단음에 관한 음성학적 특징—지속시간과 F0에 주목하여—」『日本語教育』93 韓国日本語教育学会 pp.1-15
 金允英(2019)「한국인 일본어 초급학습자의 일본어 과열음에 관한 연구—조음위치와 음성 환경을 중심으로—」『日本語文学』82 韓国日本語文学会 pp.85-103
 金姪衍(2020)「포즈의 지도가 한국인 일본어 학습자의 말하기 유창성 평가에 미치는 영향」『日本近大学研究』70 韓国日本近大学会 pp.31-50
 _____(2019)「한국인 일본어 학습자의 일본어 음성 학습전략과 학습신념 및 학습동기에 관한 연구」『日語日文学』84 大韓日語日文学会 pp.5-21
 牟世鍾(2019)「일본어 발음교육에 관하여—清音과濁音의 교육방법—」『日本言語文化』49 韓国日本言語文化

- 学会 pp.73-91
- _____(2020) 「일본어 발음교육에 관하여－促音과 撥音의 敎育방법－」 『日本言語文化』 52 韓国日本言語文化学会 pp.99-118
- 閔光準(2019) 「일본어 어두 유성과열음의 +VOT화와 음성敎育」 『日本語学研究』 62 韓国日本語学会 pp.63 - 78
- _____(2020) 「일본어 외래어 발음습득의 언어 의존성과 보편성－12개 언어 모어 화자의 발음 오류실태 조사를 중심으로－」 『日本語敎育研究』 53 韓国日語敎育学会 pp.95-116
- 白惠英(2019) 「일본 漢和辞典 古形表記의 연구」 『日本学』 48 東国大日本学研究所 pp.221-243
- 孫範基(2020a) 「日本語の母音融合の類型論－京都府丹後地域の方言から得られる類型－」 『日語日文学研究』 115 韓国日語日文学会 pp.129-151
- _____(2020b) 「日本語のライム(rhyme)について－フリースタイルラップバトルの例から－」 『日語日文学研究』 112 韓国日語日文学会 pp.25-44
- 孫在賢(2019a) 「ピッチアクセント言語における音調変化－韓国語全羅道諸方言を例にして－」 『日本語文学』 84 日本語文学会 pp.143-158
- _____(2019b) 「韓国語大邱方言の接辞・副詞・転成名詞のアクセント－日本語東京方言との対照を兼ねて－」 『日本語敎育研究』 46 韓国日語敎育学会 pp.69-88
- _____(2020) 「韓国語統営方言と日本語東京方言のアクセントの対照研究」 『日本語敎育研究』 50 韓国日語敎育学会 pp.145-157
- 柳春善(2019) 「모음변이의 실현양상과 요인에 관한 언어 유형적 고찰－모음의 무성화와 중설화를 중심으로－」 『日語日文学研究』 110 pp.121-144
- 李京哲(2019a) 「韓國漢字音의 一音節化 경향에 대하여－合口 3等 陰聲韻을 중심으로－」 『日本近代学研究』 64 韓国日本近代学会 pp.7-20
- _____(2019b) 「韓國漢字音의 1音節化 경향에 대하여－3等 合口 陽聲・入聲韻을 중심으로－」 『日本言語文化』 47 韓国日本言語文化学会 pp.157-173
- 李京哲・楊宇(2020a) 「中國語音과 日本漢字音의 對應－中國語 唇音을 중심으로－」 『日本語敎育研究』 53 韓国日語敎育学会 pp.133-156
- _____(2020b) 「現代 中國語의 語頭 母音에 대응하는 日本漢字音」 『比較日本学』 50 漢陽大日本学国際比較研究所 pp.217-231
- 李範錫(2019) 「韓國人日本語学習者の日本語アクセントの実相－大邱地域出身学習者の場合－」 『日本語学研究』 61 韓国日本語学会 pp.71-89
- 李炳萬(2020) 「近現代における和製漢語の漢字音選択について」 『日本語学研究』 64 韓国日本語学会 pp.173-185
- 李炳勳(2019a) 「도호쿠 북부방언의 전비음화와 불투명성」 『日本文化研究』 69 東アジア日本学会 pp.239-259
- _____(2019b) 「에이방언 전비음화의 통시적 변화」 『日語日文学』 81 大韓日語日文学会 pp.217-237
- _____(2020a) 「요나구니방언의 어두자음군－최적성이론에 의한 분석－」 『日本文化研究』 73 東アジア日本学会 pp.305-323
- _____(2020b) 「최적성이론에 의한 에이방언 중설모음화의 분석」 『日語日文学』 85 大韓日語日文学会 pp.237-257
- 李玢兒(2020a) 「韓國人日本語学習者の発音に関するピルーフー因子分析を中心に－」 『日語日文学』 88 大韓日語日文学会 pp.61-76
- _____(2020b) 「韓國人日本語学習者の発音の変化」 『日本語敎育』 91 韓国日本語敎育学会 pp.85-99
- _____(2020c) 「日本語の発音指導の授業における学習者の行動と考え方の分析－授業参加観察とインタ

- ビューを通してー」『日本文化研究』74 東アジア日本学会 pp.185-203
- 李相怡(2020)「네트란 漢字音과의 비교를 통한 韓日漢字音의 字音體系 비교연구－聲類를 중심으로－」『日本語学研究』63 韓国日本語学会 pp.21-37
- 李香蘭(2019)「日本語の形容詞の連体形と終止形アクセントの実態調査」『日本文化学報』80 韓国日本文化学会 pp.149-163
- 李炯宰(2020)「한국인 초급 학습자의 일본어 인토네이션 특징 고찰-자연성 평가와 피치 레인지 분석을 중심으로－」『日本語文学』87 韓国日本語学会 pp.143-167
- 趙南星(2020)「일본어 학습자의 학습 수준에 따른 가나의 한글 표기」『日本語文学』87 韓国日本語文学学会 pp.217-240
- 趙大夏(2019)「일본어(日本語) 음성교육(音聲教育)에서 After Recording의 활용(活用)에 관한 연구」『日本語教育研究』49 韓国日語教育学会 pp.141-153
- 曹秀弦(2019)「後続母音の長短による日本語摩擦音の音声的な長さの実現－遅延反復課題を用いた生成実験と聴覚的評定に基づいて－」『日本語教育』88 韓国日本語教育学会 pp.85-97
- 陣宗福(2020)「자발음성을 통해 본 한국인 학습자의 일본어 어두 유성파열음 습득 실태－JSL 학습자와 JFL 학습자의 VOT 비교－」『日本語教育研究』52 韓国日語教育学会 pp.183-199
- 崔殷赫(2019)「상용한자표의 한일한자음 대응 관계 고찰－한국 한자음의 陰聲韻을 중심으로－」『日本学研究』56 檀國大日本研究所 pp.159-176
- 崔眞姬(2019)「課題遂行における内省ノートの分析－シャドイング練習を対象に－」『日本文化学報』82 韓国日本文化学会 pp.239-255
- 崔鉉弼(2019)「打ちことばにおける特殊拍の非規範的使用とその機能に関する考察－キャスフィの小中高生揭示板の分析を通して－」『日本言語文化』49 韓国日本言語文化学会 pp.25-46
- _____ (2020)「打ちことばにおける長音符によるイントネーション表現に関する考察－キャスフィにおける小中高生揭示板の分析から－」『日本言語文化』51 韓国日本言語文化学会 pp.103-124
- 河素偵・李京哲(2019a)「대응규칙을 통한 일본한자음 학습방안－am・ap계열을 중심으로－」『日本語教育』89 韓国日本語教育学会 pp.83-96
- _____ (2019b)「대응규칙을 통한 일본한자음 학습법－an・al계열을 중심으로－」『日本研究』51 中央大日本研究所 pp.95-112
- _____ (2019c)「대응규칙을 통한 일본한자음 학습법：ㅌ계열을 중심으로」『日本研究』32 高麗大グローバル日本研究院 pp.255-273
- _____ (2019d)「對應規則을 통한 日本漢字音 指導法－ㄱ계열을 중심으로－」『日本語学研究』60 韓国日本語学会 pp.151-164
- _____ (2019e)「對應規則을 통한 日本漢字音 지도 방안－ㅍ・ㅌ계열을 중심으로－」『日本学報』119 韓国日本学会 pp.55-73
- _____ (2020b)「대응규칙을 통한 일본한자음 학습방안－ㄹ・jㄹ계열을 중심으로－」『日本研究』34 高麗大グローバル日本研究院 pp.273-294
- _____ (2020a)「대응규칙을 통한 일본한자음 학습방안－ja・oa계열을 중심으로－」『日本語教育研究』50 韓国日語教育学会 pp.251-269
- 伊藤茉莉奈(2019)「言語的文脈が多様な日本語学習者間の単音の発音に対するピア評価の意義－日本語母語話者による評価との比較をとおして－」『日本語学研究』60 韓国日本語学会 pp.101-114
- 上野由香子(2020)「韓日国際児の日本語誤用分析－発音領域の誤用を中心に－」『日本語文学』87 韓国日本語文学学会 pp.99-119

- 北野孝志(2019)「韓国語日本語学習者の句末のピッチパターンに関する考察－日韓同一文章を用いた比較対照－」『日語日文学研究』108 韓国日語日文学会 pp.109-127
- 黒柳子生(2020)「韓国語話者の韓国語カタカナ表記に関する一考察」『日本語教育』94 韓国日本語教育学会 pp.133-145
- 酒井真弓(2020)「韓国語交換留学生の日本語音声習得に関する縦断研究」『日本学報』124 韓国日本学会 pp.41-59
- 鈴木美恵(2019)「韓国語日本語学習者の外来語発音のアクセントの分析-旧JLPT語彙を中心に-」『日本文化学報』82 韓国日本文化学会 pp.163-184
- 戸田貴子・千仙永・伊藤沙智子(2020)「グローバルMOOCsにおける日本語発音オンライン講座－韓国語学習者および教師を対象とした調査から－」『日本語学研究』63 韓国日本語学会 pp.39-55
- 柳本大地(2020)「한국어 모국어 학습자의 일본어 한자 단어 청각적 인지－프라이밍 효과를 이용한 의미 일치성 판단 과제를 통하여－」『日本語教育研究』51 韓国日語教育学会 pp.115-131
- 山本裕子・関光準(2019)「한국인 국제 결혼 이주 여성의 일본어 발음습득 중단분석- ACTFL-OPI형식의 자연발화를 대상으로-」『日本語教育研究』48 韓国日語教育学会 pp.123-141

〈요지〉

음성·음운 연구의 현황과 전망

본고는 2019년부터 2020년까지 한국연구재단에 등재되어있는 18개의 학술지에 발표된 56편의 일본어 음성·음운에 관한 연구를 조사하여 최근의 연구 동향을 살펴본 것이다. 분석 결과, 이 분야에서는 일본어 음성·음운에 관한 연구(32.1%)보다 일본어 학습자를 대상으로 한 음성 교육에 관한 연구(44.7%) 쪽이 이전 주기와 마찬가지로 집중되고 있다는 것을 확인할 수 있었다. 이러한 경향은 국내에서 일본어 모어화자의 음성데이터 수집이 어려운 연구 환경에서 온 결과라고 볼 수 있다. 이에 최근 연구에서는 코퍼스를 활용한 음성DB의 전자자료와 통신언어(打ち言葉)의 문자자료가 음성연구로 도입되고 있다는 점을 들 수 있다. 또한, 문자 정보와 의미의 관계를 인지심리학에 접근하여 실험한 연구도 주목할만하다.

그리고 분야별 연구 주제를 보면, 음성연구(55.3%)에서는 특히 초분절음에 주목한 연구가 활발하게 이루어지고 있는 반면에 음운연구(39.3%)는 분절음에 주목한 음운이론과 한자음에 관한 연구가 대부분이었다. 따라서 앞으로는 실증적인 음성학과 이론적인 음운론 연구가 톱니바퀴처럼 상호유기적인 관계 속에서 이 분야의 연구를 진행해 간다면, 더불어 젊은 학문후속세대 양성과 일본어 교육과도 연계해 간다면, 현재 머물러있는 이 분야의 연구가 크게 진전될 것으로 전망한다.

논문분야 : 음성학, 음운론

키 워 드 : 분절음, 프로소디, 음성교육, 음운이론, 한자음

■ 고혜정(高慧禎)

가톨릭관동대학교 부교수

khj0226@cku.ac.kr

- 投稿日 : 2020년 12월 30일
- 審査開始 : 2021년 1월 12일
- 審査完了 : 2021년 2월 15일
- 掲載確定 : 2021년 2월 16일